

元勇者。現代日本でJKやってます

猫ニヤンニヤンニヤンニヤンニヤン…etc

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

剣と魔法の世界に存在するフルゾン大陸は、突如として侵攻してきた人類に仇なす謎の敵性生物に大陸の4分の3を占領されてしまう。後にその敵性生物は魔族と呼称され、その敵性生物の頭目は伝承に準えて魔王と名付けられた。

この危機的状況に大陸諸国は歴史的な軋轢を無くし、人類統一戦線を結成。

各国の軍隊から成る連合軍を組織し魔族の軍勢へ対抗していく。

そんな中、統一教会によつて選定された農民の青年。人類最後の希望である勇者は、各国から招集された3人の若き天才を率いて魔王を倒す使命を帯びる。

激化していく人類と魔族の戦争。

ついに、勇者一行は長い旅路の末に魔王へと戦いを挑むこととなつた。

想像を絶する強さを見せる魔王。

死力を尽くす勇者一行。

そして長い長い死闘の末に死亡してしまった勇者は、気が付くと魔法の存在しない全く別の異世界に赤ん坊として転生していたのであつた。

何故か、女の子として……。

これは、元勇者の少女が現代日本でJKとして生きていく物語である（前置き長い）。

目

次

プロローグ①

プロローグ②

歯車と歯車

そして歯車は回りだす

20 8 5 1

# プロローグ①

強力な魔法が飛び交い、鋭い剣戟が辺りに響き渡る。

喧せ返るほど濃密な闇の魔力が漂う魔王の根城。

「はあはあ……」

剣を支えに、一人の青年が息を荒げて膝を付いていた。

限界などと言う段階はとうに過ぎ去り、青年の骨は軋み、筋肉は悲鳴を上げている。

古の伝承より伝わる魔王の力は想像を絶するものだつた。

息を荒げる青年はボロボロで、鎧は一部が碎け散り、その隙間から血を滴らせている。

朦朧としていく意識。

その中で想起されるのは、辛く厳しいここまで道のりだ。

悲しい時。嬉しい時。

そして、仲間達との絆。

だが、その冒険もそろそろ終わりが見えてきた。

青年は想いを胸に力を全身に込めて立ち上がるうとするも、しかしピクリとも身体は動かなかつた。

焼けるように体中が痛い。

グラグラと暗転とする視界。

剣の柄を放してしまいそうになつたその時、後ろから鈴のように柔らかく、されど芯の通つた声が青年にかけられた。

「勇者様……これが最後です！ 主よ……ッ！ 我らに癒やしを…キュアヒーリングっ！」

後方で聖女がボロボロに成りながらも最後の回復魔法を唱えた。

送られる温かな光が青年を包み込み、再び戦う力が湧き出してくる。

「ありがとう……ラシル……」

青年はヨロヨロと立ち上がり、再び剣を構えた。

「俺はまだ……戦える……ッ」

今こそ決着の時!!

痛みを無視し、青年は全身に魔力を漲みなぎらせる。

それに勇者の回復する時間を稼いでいた仲間が気が付いた。

「……戻ったか勇者殿！　早くしろ！　もう長くは持たんぞ!!」

魔王の鉤爪を打ち払いながら剣聖が叫んだ。

「勇者…！　頼んだ…!!」

魔王へ強力な魔法を打ち込む大魔導士が叫んだ。

「勇者様……どうか世界に平和を…!!」

地面に倒れ伏す聖女が力なく叫んだ。

そうだ……！　俺が…！　俺達が…！

……終わらせるッ!!!

「はああ……【雷鳴纏化】!!

決意と共に青年から漲みなぎった魔力が全て雷属性へ変換され、全身の筋繊維へ送り込まれる。

髪の毛が逆立ち、青年の身体を激しく波打つ青白いオーラが覆う。

同時に、青年の持つ聖剣も雷の魔力を帯び、周囲へバチバチッと威嚇するように青い稲妻が迸つた。

「魔王ッ!!　これで最後だッッ!!」

魔王の紅い瞳がギョロリと青年を捉える。

全身を青黒い血に染める魔王は、片目が潰れ、頭部にあつた二本の角が折れ、4本ある腕の内の1本を黒ずんだ煤の塊にしていた。

まさしく満身創痍と言つた様相。

しかし、未だ蠢くように溢れ出す闇の魔力は激しい戦闘に衰える事を知らぬようであつた。

『これで最後……だと？』

喉から底冷えのする笑いをクツクツと魔王が上げた。

魔王の全身から闇の魔力がゴオツとさらに激しく迸る！

「ぐおおつ！」

魔王に斬りかかるうとしていた剣士が魔力の余波に吹き飛ばされ、

巨大な柱へ砂煙を上げながらめり込んだ。

「まだ…これだけの…力が…」

絶望したように呻く魔法使いが杖を手放す。

その隙を見逃す魔王ではない。

すかさず呆然と立ち尽くす魔法使いへ炎の魔法を打ち込んだ。

「ああああああああ!!!」

着弾した魔王の炎の球は柱となり、魔法使いを飲み込む。

「魔王ッ!! 貴様アア!!!」

青年の怒りに呼応するように周囲へバチバチと雷鳴が轟く。

青年は音を置き去りにして魔王へと斬りかかって行つた。

魔王が口から凍てつく吹雪を吐き出すも無視して青年は突つ切つた。

「であああああ!!!」

ガキンツツ!!

吹雪を切り抜け剣を振り下ろすも、しかし渾身の一撃は魔王の魔術防壁に阻まれる。

『その一撃……、最後の一撃と見た。我が手中で永遠<sup>とわ</sup>の眠りにつくがよい……人間!!』

「まだだ……！ 魔王ッ!!」

青年は凍り付き霜が降りた身体を酷使し、無理やり力を込めた。

「ああああああ!!!」

ビキリ……と魔術防壁にひび割れが入る！

『グヌウ……！ 馬鹿な……！ これが勇者……!!』

魔王が修復しようと腕を掲げて魔力を込めるものの、ひび割れは留まることが無く広がつていった！！

『私は終わらぬ……!!』

そう叫んだ魔王の胸部が膨らみ、口から熱風が漏れ出す。灼熱の炎が来る……！

そう直感した青年は、血を吐き出しながら咆哮し、さらに力を振り絞つた。

「ぐあああああ!!!」

次の時、魔王の口から業火が吐き出され、それに数瞬遅れて魔術防壁が小気味の良い音を立てて割れた！

灼熱の炎が迫る。聖剣が魔王の脳天へ吸い込まれる。

その瞬間、空間が崩壊した。

文字通り崩壊していき、バラバラと虚無を押し広げるよう<sup>に</sup>空間が崩れ落ちていったのだ。

そこへ青年は炎に焼かれながら落下していき……

……

……

ジジジジジジジジジジジジ……

目が覚めた。

モソモソと布団から細く白い手が這い出す。

「……またこの夢か」

少女は枕の横に置いてあるスマートフォンのアラームを<sup>ねむけまなこ</sup>眼氣眼のまま止めた。

## プロローグ②

ベッドから這い出た少女は、クローゼットに仕舞つてある高校の制服を取り出す。

ワイシャツを着て、スカートを履き、リボンを付け、ベストを装着し、最後に黒いニーソを履いた。

そのまま少女は2階にある自室から出て、1階のリビングへ降りて行く。

リビングの食卓には少女の父親がスース姿で座つていて、コーヒーを啜りながらニュースを見ていた。

その様子をチラリと横目に見た少女は、そのままテレビの前に立ち尽くし、ボーツと父親と一緒にニュースを眺め始める。

「何やつてんの耀。早く朝<sub>ご</sub>はん食べちゃいなさい！」

すると母親がキッチンから慌ただしく出てきて少女、もとい耀の朝食を食卓の上に置いた。

耀は席にノソノソと着くと朝食を食べ始める。

朝食はクロワッサンであつた。

これボロボロするから嫌なんだよなあ……。

耀は心中で不満を漏らしながらもモソモソとクロワッサンを咀嚼する。

まあ、もちろん前世で食べていたものよりは断然マシなのであるが……。

我ながら舌が肥えたものだ。クロワッサンも小さい頃は凄くおいしい、くらいしか感想がなかつた気がする。

耀がそんなことを考えていると、父親がコーヒーの入つていたカップを下げ、カバンを持った。

「そろそろ出る」

母親がひよっこりとキッチンから顔を出す。

「いつてらしゃい。忘れ物は大丈夫？」

「ああ」

そのまま耀の父親はリビングから出て玄関へ向かつていった。

「<sup>ひかり</sup>耀も急ぎなさい」

「ん」

母親の矛先がこちらを向いたので耀はさつさと洗面所へ行くことにした。

父親が家から出していく音を聞きながら、最後の一欠けらを口に放り込むと野菜ジュースと一緒に胃に流し込む。

「<sup>ひかり</sup>つそさん」

立ち上がり、洗面所へ向かおうとすると兄がリビングに入ってきた。

「母さん、俺のメシある？」

兄の髪はいつも通りにボサボサで、眼鏡越しに見える目には隈がある。見るからに不健康そうな見た目だ。

「あんたは暇なんだから自分で作りなさい」

「ええ……生活費とか多めに入れてるし良いじゃんか」

「黙れ二一ト」

そのやりとりを無視して耀はリビングから出ていく。

<sup>ひかり</sup>耀の兄は大学を中退した後、定職に就かずに家に居座っているため両親から冷たくされているのだ。

唯一の生命線はネットのサイト運営で稼いだ生活費を家に入れていることであるが、それでも自立出来ていないことへの両親の不満は大きい。

洗面所に入つた耀は顔を洗い歯を磨くと、少しだけ寝癖のあつた長い髪を整えてゴムで二つに結ぶ。

それは俗にいうツインテールというヘアースタイルだつた。

用事を終えた耀は洗面所から出ようとするが、ふと何となく鏡の方を向くと、ジツと自分を食い入るように見つめた。

そこには小柄で気怠そうな表情をした少女が居た。

日本人ばなれした碧い瞳に艶めく金髪。そして透き通るように白い肌。

形の良いくつきりとした眉からは少しの凜々しさを感じられた。

しばらく耀が鏡を見つめていると、ぼんやりと今の自分がかつての

自分に重なった。

思わず鏡に手を添えて、耀は無意識に呟く。

「オレは世界を救えたんだよな……？」

その瞬間、ぼんやりとしていた焦点が合わさり、かつての自分はフワリと消え失せた。

鏡の中の耀の顔は眉尻が下がり、なんだか泣きそうになっていた。それを自覚した耀は自嘲気味に頬を釣り上げる。

「くだらない……」

そうだ。オレにはもう関係ないんだ。

耀はツインテールを揺らしながら強く頭を振ると、そのまま洗面所を静かに立ち去つた。

## 歯車と歯車

金色のツインテールを靡かせて一人の少女が電車からホームへ降り立つた。

小柄な少女はセーラー服を着た小学生のようである。実際、146センチしかない彼女はよく小学生に間違われる。

彼女が初対面の人間とする会話は、身長の話題かハーフなのかと言う話題になる可能性はうんと高かつた。いや、初対面でこの話題にならなかつた事はもしかしたら一度も無いのかも知れない。

そんな彼女の名前は悠木耀。

現在、岩津高校に通う高校2年生。

かつては人類最後の光として闇の勢力に立ち向かつた異世界の勇者である。

生前に身に着けた魔法などの技術は使えるが、だからと言って漫画のような事件に巻き込まれる訳でも無く。

背が低くてハーフでもないのに金髪碧眼と言う大きな問題点はあるものの、耀はゲーム好きの女子高生として前世と比べれば平凡な生活を送っていた。

そして春の温かさと平和の有難さを噛み締めながら、今日と言う耀の一日は平凡に過ぎ去っていく……。

……はずであつた。

ガラガラガラ。

引き戸を開けた耀は教室に入ると、後ろ手で扉を閉めながら時計を確認した。

時計はホームルームまで残り五分を指しており、いつも通りの時間。

普段よりも何故か大きい教室の喧騒を聞きながら、カバンを仕舞うと耀は自分の席へ着席した。

そして耀は隣の席に座る少女へ挨拶をする。

「おはよ、城咲」

「おはよう」

すると、その少女は微笑んで耀に挨拶を返してくれた。

眼鏡をかけたショートボブの少女。

見るからにおつとりとした雰囲気で、漂う優しいオーラからは柔らかな母性を感じる。

身長は耀よりも10センチ以上高く、胸は母性があるせいかそこそこ大きかった。

彼女の名前は城咲 恵。

その見た目通り城咲 恵の優しさは本物で、1年生の頃に教室でいつもぼつちであつた耀に声を掛けてくれたのだ。

以来、昼食などは城咲 恵と一緒に耀は食べていた。

所属人数の少ない文芸部への入部を彼女から促されたりもして、城咲 恵とは同じ部活動の部員もある。

耀にとつて、城咲 恵はこの学校唯一の友人と言つて良い存在だった。

耀は表情を柔らかくしながら彼女へ話題を振る。

「今日は騒がしいけど何があつたのか？」

「うん…なんかね、転校生が今日このクラスに来るらしいよ」

「転校生？」

耀は少し不思議そうな顔をして続けた。

「こんな時期に？ まだ5月の中旬だぞ？」

「うん…私も変だと思う。でも噂によれば高級車で登校していたみたいだし、家庭の事情とか凄いんじゃないかな？」

「…、高級車で登校…。何処の世界の住民だよ。それって噂が独り歩きしてるだけじゃないだろうな？」

耀の引き攣った顔を見て城咲は苦笑いをする。

「あはは…かも知れないね。私も聞き耳立ててただけだし…」

他にも聞けば、凄い美少女でモデルのようなスタイルをしているらしい。

どんどん噂の信憑性が怪しくなつてきている。

「まあ、何にせよ本人が登場すれば全て明らかになるか」

耀がそう言うと、ちょうどよくホームルームの始まりを告げるチャイムが鳴る。

するとチャイムを聞いたクラスメート達が疎らになつて自分の席へ戻つていった。

耀が学校生活でよく見るいつも通りの光景だ。

少しして担任の教師が教室に入つてくる。

耀達のクラス担任は体育系統の中年教諭で、短髪に灰色のジャージがトレードマークの男性だ。

名前は黒沢である。

「突然だが今日はお前らに報告がある」

教室が少しだけ色めき立つた。

「ああつと…すでに知つている人も居るみたいだが、転校生が今日このクラスに来ることとなつた。お前らに紹介する」

そう言つて先生は転校生を廊下から教室へ引き連れて来る。

背中までかかる黒髪が漆のように艶めき、サラサラと絹のように揺れていた。

おお：確かにこれは噂通りの……。  
耀は思わず息を飲んで納得した。

ここまで噂されるのも無理はないな、と。

「今日からこのクラスで勉学を共にする漆羽京子です。皆さんどうぞよろしく」

自信と霸氣に溢れた表情で自己紹介をした彼女は間違いなく美少女と表現することができた。

黒い瞳には力強さが宿つっていて、キリツとした眉も相成り全体的に勝ち気な印象を覚える。

そして何より特色すべきはそのスタイルである。身長は165～170センチ程で有ろうか。平均よりも高い背にスラツと伸びた美脚。そして貧相すぎず豊満すぎないヒップとバスト。

それはアジア人にとってまさしく理想的なスタイルだ。

次にオーラ。

教室の壇上に立ち、転校生特有の少し、デザインの違う制服を着てい

る事を差し引いても、彼女からは異質な雰囲気が漂っている。

影が濃すぎるとでも言うのだろうか。耀は彼女に意識が吸い寄せられる事を自覚する。

今なら高級車で登校してきたと言う話も耀は信じられた。

金持ち特有の英才教育。美少女と言うこともあるのだろうが、彼女から感じる独特なオーラにはそれしか説明が付かないからだ。

しばらくシン……と静まり返っていた教室。

その空気を変えたのは担任の黒沢先生だ。

「どうしたお前ら！」歓迎の拍手だ！」

それを聞いたクラスメート達は我に返つたように疎らに拍手が響いた。

次第に拍手は力強くなつていき、クラスのお調子者達が「よろしく転校生！」などと野次を飛ばし始める。

恐らく3つ隣の教室の方まで聞こえているだろう。

凄い熱狂である。普通の転校生ではこうはなるまい。

もちろん耀も適当に拍手しておいた。

協調性が無い奴は村八分。前世で勇者になる前はしがない農民だった彼女は、その辺はよく心得ている。

「静かに！ 静かにしろお前ら！ それじや、漆羽の席はそこの右後ろの空席にしたいと思う」

教室の拍手と野次を止めた黒沢先生は漆羽の席を指差した。

昨日にはなかつた最後部で右端の座席だ。

耀は真ん中方の席なので彼女とは余り近くない。

ちなみに席はくじ引きで決められる。耀が城咲と隣の席になつたのは全くの偶然であつた。

「じゃあ、赤坂。隣の席だから漆羽に色々と教えてやつてくれ。漆羽は席に付いて良いぞ」

再び「赤坂、V I Pの案内まかせたぞー！」などと野次が飛んだ。

それを聞いた赤坂と言う女子はオロオロと狼狽えている。

そしてスタッフと指定された席で立ち止まつた転校生……もとい漆羽はニコリと笑つて挨拶をした。

「よろしく」

「あ…は、はい！ よろしくお願ひします！」

ガチガチに緊張する赤坂を見て漆羽はクツクツとおかしそうに笑つた。

「私達は同級生だろう？」 敬語なんてよそうではないか

「は、はい……あ…いや、うん…よ、よろしく漆羽さん」

何故か顔を赤くしている赤坂。

「ふふ……よろしく」

漆羽はそう言うと席に着いた。

ううん、なんだアイツのねつとりとした喋り方は。随分と様になつているな……。

そんな事を思いながらジーツと漆羽を見ていた耀であるが、漆羽がチラリと視線を向けてきた。

二秒ほど目が合うと、漆羽は口角を吊り上げた。

その笑みに気後れした耀は目を逸らす。

うつ：何だか迫力のある笑みだ……。

美人だからかな……？

再び視線を向けると漆羽は耀をもう見ていなかつた。

「漆羽。荷物は後で俺が持つていくからな。と言う訳でみんな新しいクラスメートと仲良くしてくれ。そんじゃ、ホームルームを再開する。お前ら静かにして前を向け！」

こうしてホームルームはいつも通りの諸連絡へ移つていった。

ホームルームが終わり1限目の授業が始まる前の時間。

ワイワイと漆羽の周りを複数人が取り囲んでおり、質面攻めにしていた。

よく見ると、取り囲んでいる人間の中には他クラスの者まで混ざつている。

「凄い人気だな……あの転校生」

「うん…人間つて新しい何かは意識せずにいられない生き物だから」

耀の呴きに、やや苦笑いをしながら城咲が答えた。

クラスメート達のことを子供っぽいとでも思つていそうな態度に見える。

「それにしたつて異常だよ。普通の奴だったらもう少し落ち着いた感じになるだろ」

「あはは…確かに…。彼女、凄いキラキラしてるものね」

こうして二人の会話通り、それからの学校生活は漆羽京子の話題

で持ち切りになつた。

それを見た耀はなんだか今まであつたクラスの日常が無くなつてしまつたようと思う。

しかし、その非日常も続けば日常になる。

そう言う意味で、耀は漆羽が転校して來た事をあまり気にしていなかつた。



そして1週間程が経ち、漆羽がクラスに馴染み始めた日の放課後。学校的授業を終え、文芸部の部室へ向かつた城咲と別れた耀は、昇降口前の下駄箱を開ける。

すると、靴の上に一通の手紙がポンと置かれていた。

その手紙を手に取つた耀は辺りをキヨロキヨロと見回す。

「うーん、これまたベタな…。これつてそう言う事だよな?」

これがラブレターだと決まつた訳ではないが、耀がこの手法で告白されるのは小学生以来の事であつた。

中学に上がつてからは、殆どが通話かラインである。

実は耀は転生してからそこそこと異性にモテていた。

もつとも、本人は元男なのでこの事実には複雑な気分にさせられているのだが……。

「まあ、そうと決まつた訳じやない。取り敢えず開けて見るか」

耀は横長の白い封筒を開くと、中から手紙を取り出す。

するとそこには『今日の放課後に屋上で待ちます』、と印刷と見紛う程の達筆な文字で、そう簡素に書かれていた。

「なんだこの綺麗な文字……どんだけ気合入れて書いたんだよ」

それにしても屋上かあ……。普通に閉まつてるだろ。

イタズラかな?

耀は手紙を裏返したりして観察しながら訝しむ。

そして、どうするべきか迷つた末に耀は……。

「ここに来た」

「どうしてそうなるの……」

文芸部の部室で城咲が耀にツッコミを入れる。

城咲は長机に向かつて小説を書いており、邪魔をされていることに

少しだけ不機嫌そうだつた。

本棚に囮まれた部室には城咲と耀しか居ない。

部員はこの二人だけだつた。

「まあ…オレも一応、文芸部の一員だし別に良いだろ?」

「普段は顧問が居るときしか参加しない癖に……。早く屋上に行つて

あげたら?」

「チツチツチ……そこが肝なんだ」

耀は舌を鳴らして否定すると、パイプ椅子を持つてきて長机の端の方に座つた。

耀は部室にしばらく居座るつもり満々である。

「しばらく時間を空けて行つてもまだ居たら、そいつの本気度はそれだけ高いって事だろ? 幸いにも放課後つてだけで時間の指定はなかつた。それに場所からしてイタズラかも知れないからな。その場合、早く行くと惨めだ」

城咲は呆れたように眼鏡を掛け直した。

「耀ちゃんつて意外と面倒臭いよね。早く家に帰つてゲームすれば良いのに」

「あのな…告白を振るのは意外としんどい。ましてや面と向かつてなんて、さらにもしんどい。その儀式を避けられるのなら放課後のゲームを我慢するくらい余裕だ」

「本気度を確かめる割には振ること確定なんだね」

「まあな……オレは恋愛とかに興味ないんだ」

「そう言つてる癖にモテモテで羨ましいよ」

「モテモテって言つても告白されたのは……たぶん30回くらいだぞ?  
? 人生のトータルで」

「十分多すぎるよ」

間髪入れない城咲の皮肉げなツツコミに、耀は親指をグツと立てた。

「さすが城咲……ナイスツツコミだ……」

「全く……居ても良いけど邪魔はしないでね」

そう言つて城咲は原稿用紙に再び向かい始める。

「やはり……持つものべきは友達……」

「はいはい友達友達」

耀の咳きに城咲はペンを進めながら適当に答えた。

それを見て耀は邪魔をするのを辞め、スマートフォンでゲームの情報サイトを閲覧し始めた。



「ホントに鍵が開いてるのか……?」

時刻は夕焼け色の空が沈み始めた頃。

耀は屋上への扉に手を掛けていた。

城咲が部室を閉めて下校してしまったため、耀はこうして渋々と屋上へ足を運んでいたのだ。

ガシヤリと取つ手を捻り、扉を押すとあっさりと開いていく。

外は東側がすでに暗くなっていた。

屋上に来るのは初めてだな。

いつたい呼び出した奴はどうやつて開けたんだ? ヤバイ奴じやなきや良いんだが。

そう思いながら耀が屋上を見回すと、彼女は入り口へ背中を向けてそこに居た。

夕日を浴びて煌めく黒髪。

それが少しだけ風に揺られて棚引く。

耀が予想外の人物に真顔で立ち尽くしていると、彼女はゆっくりと振り返る。

「ああ…待ちくたびれた……」

耀を射抜くのは、力強い黒の瞳。

そこに居たのは果たして、今注目の的である転校生。漆羽京子その人であつた。

「随分とこの私を待たせるではないか…悠木耀？」

バタン！と耀の後ろで扉が力強く閉まつた。

二秒ほどフリーズしていた耀であつたが、重く口を開く。

「オレを呼び出したのはオマエか？ 転校生」

それを聞いた漆羽がクツクツと喉を鳴らした。

「私以外に誰が存在すると言うのだ？」 悠木耀

謎の張り詰めた緊張感が耀を襲う。

この緊張感は耀が前世で強敵を前にする時、必ず感じていたものだ。

な、なんなんだよコイツ……。

漆羽を半分だけ西から夕日が染めるが、耀にはそれが逆に、彼女が半分だけ闇に染まっているように見えた。

ツー、と耀の背中を冷や汗が伝つていく。

「……。いつたい何が目的なんだ？ や…オマエ…何者だ？」

「何者か…だと？ クク…貴様は私を知つている」

漆羽が笑みを浮かべながら一步、一步、とゆっくりと近づいて行き、それに対しても後退りしていく。

耀の顔は強張り、青い瞳は恐怖の色に染まっていた。

「し…知らない…。オレはお前とこの学校で初めて会つたはずだ…。そ、それ以上近付くと人を呼ぶ…！」

ピタリ…と耀の言葉に漆羽が立ち止まる。

「人を呼ぶ…か…。さては乙女だな」

そう呟いた漆羽が真顔で俯き、その瞳を閉じた。

「私…いや、我…と言えば分かるか…？」

漆羽が顔を上げ、閉じていた瞳を耀へギョロリと向ける。  
その瞳は紅く染まり、口元は好戦的な笑みに歪んでいた。

「選ばれし人間…勇者よ……」

「な……」

耀は目を大きく見開き、絶句する。

「クク…ふふ…ふはははは…！」

それを見た漆羽は声を出して笑つた。

「ああ…！ 随分と面白い顔をするのだな勇者よ！ さては貴様！ 完全にこの世界に馴染んだな!?」

漆羽の高笑いを背景に、ようやく耀の顔に理解と平常の色が宿つた。

「ま…魔王…！ ば、馬鹿な…！ 有り得ん!!」

「ククク…何が有り得んだ？ 勇者よ」

耀の全身から脂汗が吹き出る。

コイツがなんでこの世界に…!!

「何もおかしな話では無い。貴様があの場で死に絶え、この世界へ転生した。ならばそれは貴様に限った話ではない。道理であろう？」

魔王の言葉を無視し、耀は全身に魔力を漲らせる。

すると耀を中心には空気が乱れ、漆羽と耀の制服や髪がバサバサと風に揺られた。

「何が目的だ…！ 魔王…！」

「なに…我的は単純明快の一言に尽きる…」

グワンッ…と漆羽から可視化できる程に濃い闇の魔力が周囲へ迸つた！

ビキリ…と校舎のコンクリートにヒビが入り、屋上のフェンスがグニヤリと反り返る！

そして学校中の窓ガラスが割れる音が辺りに響き渡つた！  
耀はと言うと、その闇の本流の中、自らの身体を魔力で包み込み身を守る事で精一杯だつた。

両者の間には隔絶された実力差が横たわつてゐる。  
今の耀には聖剣も無ければ、仲間も居ないのだ。

「我の目的…それは勇者。貴様との再戦だ」

「くつ…さ、再戦だと…?」

漆羽はかつての出来事を思い出すように夜空を見上げた。

すでに夕日は完全に沈んでいる。

「……前世で私は、脳天を聖剣に叩き斬られて死亡した。勇者よ。他ならぬ貴様自身の手によつてな」

漆羽は耀を紅い瞳でギロリと射抜く。

「貴様がここに居ると言うことは、最後の悪あがきである炎の吐息で相討ちとなつたようだが…それでも屈辱である事には変わりない」

それを聞いた耀は警戒しながら、魔力で身体能力を強化していく。まずは神経系。その次に筋肉だ。

「完璧であるはずの我唯一の汚点。貴様への敗北を今こそ払拭する…!!」

漆羽はバサツと両腕を広げる。

それに対し耀の警戒心が一気に高まつた。

しかし漆羽は何もすることなく、そのまま力無く腕を下ろした。

「はずであつた……」

漆羽は眼をゆつくりと閉じて、再びゆつくりと開く。

すると紅かつた瞳は黒色に戻つていた。

「どうやら私は思い違いをしていたらしい」

スタスターと歩いてくる漆羽に耀は身体を強張らせたが漆羽は何か

してくる事もなく、そのまま耀と擦れ違つた。

耀は警戒を緩めず、振り返つて彼女に決して背を向けない。

しかし漆羽は耀に反応することなく、屋上の扉に手を掛けた。

「勇者…いや、悠木耀。今の貴様を殺したところで私の目的は果たせそうにない」

そう言つた漆羽は歪んで上手く開けなかつた扉を強引にバキン!と取り外すと、そのまま立ち去つて行つた。

そして屋上に1人残つた耀は緊張の糸が解れたように、その場にペタンと座り込んだ。

「魔王も…こっちに来ていた…」

しばらくボーツと座り込んでいた耀は…元勇者はそのうち少しだけ頬を無意識に緩めた。

「そうか…オレは世界を救えたんだな…」

夜空に浮かぶ欠けた月が、地上を明るく照らしていた。

## そして歯車は回りだす

その後、屋上が荒れ果て学校中の窓ガラスが割れていた件には警察が出動し、しまいには不可解な事件としてニュースに取り上げられるまでの騒ぎとなつたが、1ヶ月も経つと事件の事について噂する人間は見なくなつた。

そんな今 periods は 6月の下旬に差し掛かろうとしている頃。  
あれ以来、魔王」と漆羽京子が耀に絡んで来ることはなく、耀と目を合わせることもない。

彼女はすっかりクラスの中心的なポジションに居座り、人気者として日常へ溶け込んでいた。

「この前の体育の授業、漆羽さん凄かつたよね。サッカー習つたの？」

「特に習つていた訳ではないな。単純に運動神経が良いだけさ」

「凄い！」漆羽さんつて何でも出来て欠点がないみたいだね！」

「ふふ：ありがとう。でも私にだつて欠点はいくつもある。たとえば、辛いものが苦手だつたりね」

「あははは！ 漆羽のそれは欠点つて言わねえよ！ お茶目ポイントだな！」

耀は休み時間中の漆羽をジッと見つめる。

ああして楽しそうに談笑しているが、耀には彼女が人間と言う化けの皮を被つた怪物にしか見えなかつた。

前世で 耀は、人々が魔族の手によつて苦しむ姿を嫌というほど見せられているのだ。

漆羽が何か妙な気配を見せれば、耀は刺し違えてでも漆羽を殺そ

うと覚悟を決めていた。

流石に漆羽と言えども近代兵器が配備された軍隊に敵う訳はないだろうが、前世のようになり勝手はさせられない。

「耀ちゃん。どうしたの？」

と、ここで城咲に声を掛けられ、耀は現実に戻された。

「ふえ…？ な、なんだ城咲？」

「なにつて……前から気になつてたけど耀ちゃんつて時々凄い怖い顔で

漆羽さんのことを見つめてるよ？」

城咲が心配そうに耀の顔を覗き込む。

「そ……そ、うか？ そんなことないと思うが……」

「嘘だよ。もしかして漆羽さんに何かされたの？」

「えつ……それは……」

耀は眼を泳がせた。

確かに耀は漆羽に何かされたと言えばされた。

主に前世での話にはなるのだが……。

「ほら、やつぱり。いつたい何されたの？」

城咲が少しだけ怒った様子で問い合わせてくるのに対して、耀は慌

てたように否定した。

「だ、大丈夫だ！ 城咲が心配するような事じゃない！」

流石に「実はオレには前世があつてさ……」などとは切り出せない。完璧に痛い奴である。

「……。……」

ジツと目を見つめて来る城咲に、申し訳なさそうに耀は手を合わせた。

「ごめん城咲！ 心配してくれるのは有り難いけど本当に大した事じやないんだ……」

「……。……」

無言で見つめ続けてくる城咲であつたが、やがて溜息を吐くと口を開いた。

「はあ……今みたいな耀ちゃんは頑固だからね。分かった、これ以上は追求しない。……だけど大変な時は必ず私を頼るんだよ？」

そう言われた耀はニッコリと微笑えむ。

「ああ！ 分かった！ ありがとう城咲！」

「全くもう……約束だからね？」

つられて城咲も優しく微笑んだ。



放課後。

いつも通り部室へ向かう城咲と別れた耀は、昇降口で下駄箱を開けた。

するとそこには靴の上に置かれている白い封筒。

耀はそれを手に取ると、辺りをキヨロキヨロと見回した。

「凄いデジャヴだ…まさか奴じやないだろうな？」

耀は例の転校生の顔を思い浮かべながら、封筒を開く。

するとそこには、やはりと言つて良いか印刷と見紛う達筆な文字で、『放課後、体育館裏で待ちます』と簡素に書かれていた。

「あの野郎…。今度はいつたい何を企んでやがる…」

また学校中の窓ガラスを割られては堪らないので、今度ばかりは話し合いの意思を見せようと耀は思う。

漆羽には質問したい事も山ほどあつたから良い機会だ。

それに学校中の窓ガラスが割れてしまつた件については、自分にも責任の一端があると耀は罪悪感を感じていた。

何の用があるかは知らないが、なるべく漆羽を刺激しないように耀は話し合いを進めることを決意した。

## ★

体育館裏とは校舎と体育館の間に出来た閉鎖的な空間の事である。耀が体育館裏へ向かうと予想通り漆羽はそこに居た。

彼女は胸の下で腕を組み体育館の壁へ背を預け目を閉じている。

厨二臭い格好ではあるが、彼女のプロポーションでそれをやられる

と絵になつていた。

漆羽の少し前で耀は立ち止まると、睨み付けながら口火を切つた。

「オマエ…今度はいつたい何の用なんだよ…」

それに対しても漆羽は瞼を緩慢に開いて耀を見ると、愉快げに笑みを浮かべた。

「耀、貴様もか…するとこれは中々に興味深い状況だな」

よく分からぬ事を呟く漆羽に、耀はさらに強く目尻を立てた。

それに耀<sup>ひかり</sup>つて何だよ耀<sup>ひかり</sup>つて…!

人を下の名前でサラツと呼ぶな氣色悪い…!!

「あ？ オマエ何いつてんだ。呼び出したのはオマエだろ？」

「ん…？ ああ…私も呼び出された側だ」

そう言つて漆羽<sup>うるしばね</sup>は先程から手に持つていた紙を耀<sup>ひかり</sup>にピラツと見せた。

するとそこには耀<sup>ひかり</sup>が貰つた手紙と同じ内容が書かれていた。

構図なども同じで、まるでコピーしたようである。

「な、何いつてんだよ。この字つてオマエのだろ？」

耀<sup>ひかり</sup>はそう言つてポケットから手紙を取り出した。

その様子をチラツと見た漆羽<sup>うるしばね</sup>が腕を組み直す。

「よく見ろ。それは印刷された文字だ」

言われた通り耀<sup>ひかり</sup>は指で触つたりして、よく確かめた。

「ホントだ…。印刷されてる…」

だとすれば一体誰がオレとコイツを…。

耀<sup>ひかり</sup>の頭の中が疑問で埋め尽くされた。

「ふん…完璧すぎる文字と言うものも罪か…」

漆羽<sup>うるしばね</sup>が少しだけドヤ顔で呟く。

彼女の整つた顔はドヤ顔でさえも絵になっていた。

それを見た耀<sup>ひかり</sup>の額に血管が浮き出る。

「オマエは存在自体が罪だから安心しろよ魔王」

「そう曰くじらを立てるな耀<sup>ひかり</sup>。私が完璧すぎると言つた事実はすでに把握している」

漆羽<sup>うるしばね</sup>が耀<sup>ひかり</sup>をクツクツと喉を鳴らしながら言つた。

な…コイツは大陸で何百万人の命が犠牲になつたのかを知つていいのか!?

耀<sup>ひかり</sup>の胸の内からフツフツと怒りが湧いてくる。

「な…おま…?、この…」

プルプルと震える耀<sup>ひかり</sup>の顔がみるみる赤くなつていく。  
「少しからかつただけだろう？ 面白い奴め。しかし…戯れもそろそろ中斷しなくてはな…」

そう言つて漆羽は壁から離れ腕を組む事を辞めると、先程に耀の  
来た方を向く。

耀も釣られて見ると、そこにはコチラへ向かつてくる人影があつた。

「どうやら私達を招待したホストがお出ましのようだ」

「クソ：胸糞悪い奴だオマエは」

耀はそう呟くと、人影を観察する。

人影は中等部の白いセーラー服を着用した少女だった。

癖つ毛のあるショートボブに隈のある目元。

眉根は神経質そうに歪んでいる。

見るからに面倒臭そうなタイプであると耀は思った。

やがて、耀と漆羽に近付いて来たその少女はビシツとコチラを指差すと高圧的な金切り声を上げる。

「1ヶ月前にこの学校を荒らした犯人は貴方達ですね!!」

そう言われた耀は全く表情を変えなかつたが、内心では酷く動搖していた。

な、なんでそのことを…いや、実行犯は隣に居るコイツだけなのだが問題はそこじゃない。

まさか目撃されていたのか…!?

少女が言う1ヶ月前の出来事とは、屋上で漆羽が行つた魔力放出のことだらう。

あれのせいで学校中の窓ガラスが割れて、警察が来る騒ぎにまでなつたのだ。

問題はどうしてこの少女はその事件の中心人物が耀と漆羽である事を知つているのかである。

耀がどうして良いか分からずに身動きが取れないでいると、漆羽が得意なニヤケ面を顔に貼り付けて肩をすくめた。

「さあ…なんのことやら…」

どうしてオマエは何かを知つてそうな悪役風に惚けるんだよ!!

B級映画か!!

耀は漆羽を横目に内心でそう叫んだが、漆羽がその方針で戦端を

切つてしまつた以上は耀もそれに乗るしかなかつた。

「ああ…漆羽の言う通りだ。君が何を言つてゐるのかオレ達には理解出来ない」

漆羽と同じように知らない振りをする耀。

しかし少女は予想通りとばかりに強気の姿勢で糾弾を続けた。

「惚けても無駄です!! 貴方達があの日、校舎の屋上で魔力を使つたことについては証拠が出ています!!」

魔力…そのことを知つてゐるなんて何者だ?

前世の関係者か…あるいは別の存在か…。

それに魔力に証拠なんて物が残るのか?

魔力とは物理的な存在ではない。

耀が数巡していると、またも勝手に漆羽が話を進めてしまつた。  
クツクツと伏せた顔に左手を添えて笑う漆羽。

厨二くさい。

「な、何がおかしいんですか!? どうやら事の重大さが分かつてないようですね…!!」

「いや…愉快でな。なかなかどうして…現世も捨てたものではない

「い、一体なにを…」

少女は不気味なものを見る目で半歩だけ後ずさつだが、瞳に力を戻して踏みどどまる。

「なにを言いたいんですか…!!」

「ククク…いや、私達が犯人だが?」

顔を上げた漆羽が不敵な笑みを浮かべながら、それがどうしたのかと言わんばかりにあつさりと真実をカミングアウトした。

そう…耀を道連れにして…。

「…今日は両名共に私の家へ来てもらいます!! 拒否権はありません!!」

少女は耀と漆羽を交互に睨みながらそう言つた。

オマエ…絶対に後で覚えておけよ。

大変なことになつたら呪つてやる。

耀は魔王の再討伐を静かに決意した。